

# I 研究の概要

## 【1】これまでの研究の流れ

### 1. 『生活を楽しむ子』をめざして」までの研究（平成6年度まで）

本校では昭和53年の開校以来「社会的自立」をめざした教育を行ってきた。研究テーマとして「表現化に視点をあてた教育課程の編成」「豊かな心を持ち、たくましく行動する子」「発達と障害に応じた教育をめざして」を設定し、研究を重ねてきた。次の表が、各年度の研究テーマである。

年 度	研 究 主 題 及 び 副 題
S,53～54	「表現化に視点をあてた教育課程の編成」
55	「表現化に視点をあてた教育課程の編成と展開」
56	「表現化に視点をあてた教育課程の編成とその展開」
57～59	「豊かな心を持ち、たくましく行動する子」
60～62	「発達と障害に応じた教育をめざして」
63～H,3	「発達と障害に応じた教育をめざして」－からだづくりを通して－
4～6	「発達と障害に応じた教育をめざして」 －コミュニケーションに視点を当てて－
7～9	『生活を楽しむ子』をめざして」－題材の選定と支援の工夫－
10～13	『生活を楽しむ子』をめざして」 －個別の指導計画をもとにした授業づくり－

### 2. 『生活を楽しむ子』をめざして」としてからの研究（平成7年～）

平成7年度に、本校児童生徒の実態を振り返ったとき、他の人に指示されたり、課題や活動を提示されたりした中での活動が多いという問題点が明らかにされた。そこで、本校教育がめざす児童生徒の活動の姿を次のように考えた。

活動を楽しみ、自らの目標を持ったり、自分なりの考え方ややり方で、ねばり強く課題に立ち向かっていく。その課題をクリアしたとき、満足感や成就感を持つ。そのやり抜いた喜びが次の活動のエネルギーとなり、次の課題に立ち向かっていく。主体的に自らの生活を切り開いていくことができる姿が現在から将来に渡って生活を楽しむ子である。（本校紀要17集より引用）

この姿を求め、自己活動、思考の過程、達成感・成就感という視点で－題材の選定と支援の工夫－に取り組んだ。

前研究により、児童生徒や教師の変容が見られ始めたが、さらに活動を楽しみ、自らの目標を持って主体的に取り組んでいく姿を求め続けていきたいと考え『生活を楽しむ子』をめざして」を継続することにした。

平成10年度以降「今を楽しみ、将来も楽しむ」を合い言葉に、地域や家庭生活、学校生活を楽しみ、生活全般をより豊かにしていこうと考えた。そして、楽しむ体験、

豊かな生活の中で、必ず力は付いていくものと考えた。そのために、学校生活や授業そのものに主体的な参加や選択があり、授業の主体者として、いきいきと活動している姿を求めた。授業での主体的な姿が蓄積されて、ねばり強く前向きに取り組む姿が将来の職業生活や社会生活につながっていくと考え、授業をつくっていくことにした。

## 【2】 今回の研究

### 「『生活を楽しむ子』をめざして」－個別の指導計画をもとにした授業づくり－

#### －平成10年度－

研究主題「『生活を楽しむ子』をめざして」を継続することにした。前テーマの研究の反省と課題を検討しつつ、「題材の選定と支援の工夫」の取り組みを継続・搬化し、新たな研究の方向性を探った。そして、児童生徒一人ひとりをより見つめる方向でテーマを絞り込んでいった。その過程でわれわれは、長期間を見通した指導計画の必要性を感じた。その際、「生活を楽しむ子」の基盤となっている「自分づくり－資料1」の考え方を踏襲して、学部の連携を図りたいと考えた。また、学校をさらに楽しめる生活の場に変えていく取り組みをしたいと考えた。さらに、現在及び卒業後の家庭・地域、社会との連携に目を向けたいと考えた。QOL（生活の質）の浸透と個別の指導計画のクローズアップといった障害児を取り巻く社会情勢の変化もあり、取り組みの視点として「個別の指導計画をもとにした授業づくり」というサブテーマを設定することにした。

#### 資料1－自分づくり

本校では、子どもの発達を単に「できること」が増えていくこととするのではなく、生活の主人公として生きる力を心と身体の両面から複合的に獲得していく過程と考える。そしてわれわれは、子どもたちの内面的な育ちや心情面での変化をも大切にしていきたいと考えている。中でも心の発達の過程を「自分づくり～他者との関係性における自我形成・自己形成の発達～」という指標でとらえ、児童生徒理解や支援のよりどころとしている。

#### －平成11年度－

個別の指導計画の様式を検討しつつ授業実践を試みた。個別の指導計画は、教師を始め、子どもに関係のある周囲の者が語り合い、子ども像を検討し教育目標を確認しあうものとして作っていった。同時に、研究の仮説についても検討した。本人と周囲の願いの中で将来像を見つめ、適切な目標を設定し、共に取り組み、喜びを分かち合おうとした。「楽しむ中でつく力」と「楽しむ力」の両面を考えた。そして、自分に必要な支援を得ながら生活する中で、主体的に自らの生活を切り開いていくことができると考え「仮説（後述）」を設定した。この時、本校が実践してきた特色を「4つの柱－資料2」としてまとめ、授業づくりに生かそうとした。授業づくりの取り組みは、個の目標を元に、全ての場面で生活を楽しむ視点を生かすことを目指そうとした。

## 資料2 - 4つの柱

**QOLの理念** ADL（日常生活動作）を包み込んだQOL（生活の質）の向上を追求する。社会的自立のスキルのみを重視するのではなく、余暇的なものをも含むQOL（生活の質）の発想に基づき人格的な自立をめざす。日々の学校生活において、意思表示、意見表明、参加や自己決定を大切にする。自らの身体と心の主人公になり、生き方を決めるのは子ども自身である。

**子ども（児童・生徒）中心** 教師は注入主義や引っ張り上げ・追い込みではなく、伴走（子どもに寄り添う）、あるいは子どもの位置まで降りてきて（視線を大切にしながら）、共に歩む存在でありたい。そして子どもの主体的、能動的、意欲的な姿を大切にしたい。指導の意図は持ちつつ、支援的に接したい。発達の主体はあくまでも子ども自身であり、子どもをよりよく理解し支援するために発達診断及び個別の指導（支援）計画があると捉える。

**日々の生活を楽しく** 将来のために今がまんして勉強しているのではない。学校を学習を含んだ生活の場と捉え、その生活を楽しむ中でこそ、将来を豊かに切り開くことができると考える。大人がよかれと思って将来を押しつけることがあってはならない。子ども自身が見通しを育てる中で、将来のさらなる楽しさのために努力することも可能となろう。

**家庭や地域・社会への拡がり** 放課後の生活、家庭・地域・社会にも目を向ける。学校以外との関係を知り、ネットワークを拡げることで、「生活を楽しくしていない現状」をトータルに分析し、そこから転じて生活を豊かにする方策が見いだされ、生活を楽しむ見方もさらに拡がる。

### —平成12年度—

指導助言者や研究協力者とともに、仮説に基づいた授業づくりを行おうとした。そこで見えてきたのは、個別の指導計画を「もとにした」授業づくりの難しさである。目標に直結した学習は、ともすれば子どもの生活や「楽しさ」から離れた授業になりやすかった。サブテーマは、「生かした」がふさわしいと考え、各学部を中心として個別の指導計画とのつながりを考えた授業づくりをすすめた。また、一人ひとりの「めざす子ども像」を求めるに当たり「人格的自立—資料3」という言葉にも着目した。それまでの「社会的自立」では、他人の力は借りず何でも自分でできなくてはいけないようなイメージが付きまとった。学校、学部で検討する中で、言葉を変更した方が生活を楽しむ子をめざした取り組みにつながりやすいと考えた。そこで概念の多様さは残しつつ、学校目標の「社会的自立」を「人格的自立」とした。また、この年初めて校内で統一した形式で児童生徒全員の個別の指導計画を記入した。そして、学部を解いた縦割りの会や研究協議会において小中高、各学部間の連携をはかった。

### 資料3 - 人格的自立

明確な概念規定にはいたっていないが、前述した本校紀要17集の次の表現が最も近いと考えている。

活動を楽しみ、自らの目標を持ったり、自分なりの考え方ややり方で、ねばり強く課題に立ち向かっていく。その課題をクリアしたとき、満足感や成就感を持つ。そのやり抜いた喜びが次の活動のエネルギーとなり、次の課題に立ち向かっていく。主体的に自らの生活を切り開いていくことができる姿（前向きに生きる姿）が現在から将来に渡って生活を楽しむ子である。この姿を求める。

－平成13年度－

「保護者アンケート－資料4」「生活マップ－資料5」を加えた。本校の「個別の指導計画」は、表紙的な役割をし、後ろにたくさんの関連文書があることを確認した。そして、個別の指導計画と授業のつながりについて検討しながら授業づくりをすすめた。4年間のまとめとして、子どもの評価、研究の評価を行い、課題を探っている。

資料4－保護者アンケート

下記の欄にお子さまが出来るようになって欲しいこと、学校と家庭でともに育てたいこと、将来に向けての希望などを具体的にご記入下さい。

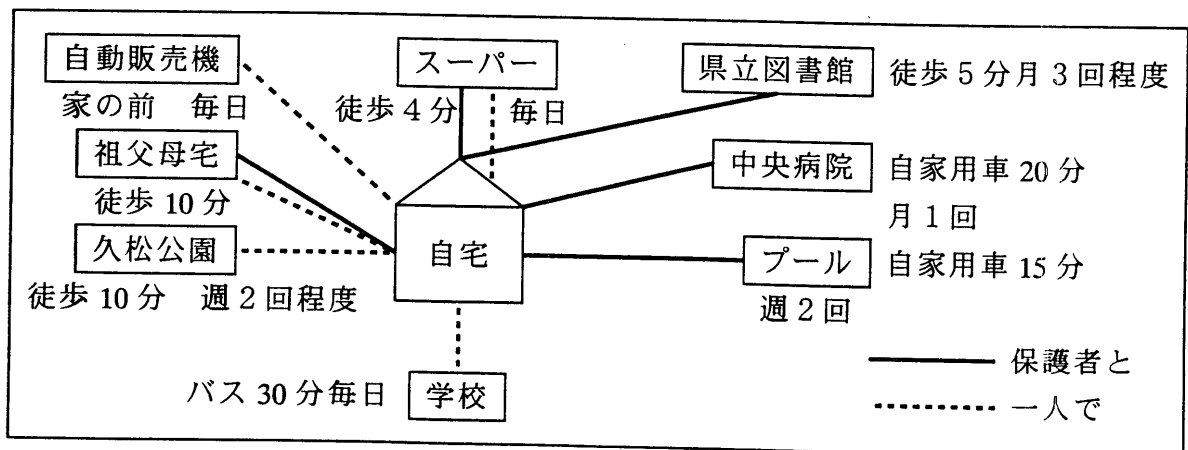
自立化	(生活習慣、着替え、食事、排泄、健康、安全など) シャツの前後ろを間違えないように着る。
社会化	(遊び、余暇の利用、友だちとの交際、通学、手伝い、地域参加など) 一人でバス通学ができるように
表現化	(コミュニケーション、文字、数、運動、絵、音楽など) ゆっくりと話し、相手に気持ちが伝わるように
その他	(将来への希望、その他どのようなことでも) 周りの人たちに愛され、さまざまなことに耐えられる体力をつけて

◎学校の生活に対して、こういった内容を学習に取り入れてほしいとか、こんな配慮をしてほしいとかありましたら、遠慮なくご記入下さい。

◎現在、お子さまに見られる興味や関心、態度、性格などで、今後大切に育てていきたい良い面をお知らせ下さい。

◎その他、学部や学級に対してご要望やご意見、ご質問はありませんか。

資料5－生活マップ



### 【3】 研究の取り組み

#### 1. 研究仮説

平成 11 年度にそれまでの取り組みを振り返り、仮説の検討を重ねた。そしてこの時点では次のような仮説を設定した。

「生活を楽しむ」の視点のもとに4つの柱（QOLの理念、子ども中心、日々の生活を楽しむ、家庭や地域社会への拡がり）を大切にしながら、個別の指導計画を作成し、授業づくりを実践する。これにより児童生徒は意欲的に、将来にわたる「生活を楽しむ力」をつけていくと考える。

「生活を楽しむ」授業をつくりながら、具体的な研究の方法を探った。また「生活を楽しむ」や「4つの柱」は本校にとってどういう意味を持つのか、繰り返し考えながら進めた。さらには「生活を楽しむ力をつけていく」ことが本当に「生活を楽しむ」ことにつながるのかにも思いをめぐらせた。研究の進行とともに、多様な説や研究方法が見えてきたが仮説はこのままで研究の最終年度を迎えた。

#### 2. 本校の個別の指導計画－資料6

氏名	学部 年	生年月日	長期目標（学部卒業時） *あるいは2～3年先。	
心身の状況	自分づくりの段階	段階別教育内容表	総合	
各種検査	自我の誕生	2	I	自立化 社会化 表現化 職業化
	自我の拡大 自我の充実		II	
性格・行動の特性	矛盾拡大	3	III	短期目標 (今年度)
	自制心の 芽生え		IV	
生育歴・家庭環境	自己形成視 の獲得	5	V	総合 自立化 社会化 表現化 職業化
	自己客観視 の芽生え		7	
	9	VI		
医療・関係諸機関 からのアドバイス	支援のポイント (自分づくり)		指導の経過と課題	
本人・保護者・担任の願い			前期	
家庭訪問・懇談の記録 *日付と参考となる事項			後期	

## 資料 6 - 本校の個別の指導計画



### (1) 考え方

#### ①心を大切にする

- ・自分づくりの観点を織り交ぜながら話し合うことに時間をかける。
- ・目標や支援は「できるか、できないか」という観点のみならず、人や環境など周囲との関わりの中で「しようとする」心を大切にし、その支援を追求する。

#### ②適切であること

一般に、個別の指導計画作成上苦慮する点に「子どもの教育的なニーズに的確に応え、適切な教育を行う目標や理念をどう定めるか」がある。また「個人目標と学校目標がどうつながっているのか」に悩む場合も多い。本校では「生活を楽しむ子」や「自分づくり」の実践の積み上げがある。これにより「学校が願う子ども像と、その子や保護者の願う姿の重なりが適切か」という判断基準や資料が整いつつあると考える。

#### ③願う姿と目標を結びつける

- ・子どもの長期目標（2～3年先の願う姿、特に生活を楽しむ姿）と短期目標（年度末の姿）、重点目標と支援を記入する。
- ・担任の願いと、保護者や地域社会、その他その子に関わるあらゆるニーズを考え合わせながら、願う姿をイメージし、大まかな目標を定めていく。
- ・大まかな目標や支援はみんなで確認して頭の中に、細かな目標や支援は担任の頭の中にあることで、願う姿と具体的な授業が結びつくことになると考える。

#### ④簡単であること

膨大な資料を作成し記入に時間を費やすことで、子どものことを話し合う時間が少なくなるのは避けたかった。そこで、これまで培ってきた文書を再構築して記入に忙殺されず、しかも大切な内容はおおむね網羅されているものを求めた。細かな目標を話し合う前に、大まかな目標をまず話し合いたいと考えた。また、活用しやすくコンパクトにまとめるため、A3用紙1枚とした。

#### (2) 様式と活用

本校が現在「個別の指導計画」と呼ぶ様式は、表紙あるいは目次のようなものである。その奥には多くの文書、資料が控えている。これは「入れ子方式」とも呼ばれる。平成14年度から義務化される自立活動の個別の指導計画も、多くの文書の一つである。事例検討会議等では、個別の指導計画1枚だけを資料とすることもできる。また、会議の目的に応じて必要な文書を添付する場合もある。個別の指導計画と関連の深い、実態把握、目標、計画、記録等の文書はおおむね次のとおりである。

ア	入学選考資料	イ	検査記録－新版K式、遠城寺式、WISC-Ⅲ等検査
ウ	生活ノート	エ	児童生徒調書、家庭環境調査票、生活マップ
オ	自立活動の個別の指導計画－資料7	カ	自分づくりの段階表－資料8
キ	段階別教育内容表－資料9	ク	事例研等ケース会議記録
ケ	保護者アンケート	コ	生活のあゆみ（通知票）

#### 資料7－自立活動の個別の指導計画

長期 目標		短期 目標		目標に照らし自立活動で特に指導したい項目
----------	--	----------	--	----------------------

ア、健康の保持   イ、心理的な安定  
ウ、環境の把握   エ、身体の動き  
オ、コミュニケーション

#### 重点とする指導内容と指導計画（2点）

		4	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3	反省と今後の課題
項目	実態	活動 （支援の方法）											
	目標	チェックアド バイスの記録											
項目	実態	活動 （支援の方法）											
	目標	チェックアド バイスの記録											

#### 資料8－自分づくりの段階表

これは本校が田中昌人、白石正久、近藤直子氏らの文献を始め、様々な資料を参考にしながら作成した表である。考え方は「自分づくり－資料1」の項目を参照。なお「自分づくりの段階表」は、バージョンが各種ある。これは一例である。





資料9 一段階別教育内容表

資料9-1 一段階別教育内容表

発達段階に応じ、ふさわしい、あるいは必要と思われる教育内容を配列した表である。平成3年「特殊教育諸学校学習指導要領解説」の「資料 各教科の具体的内容」のモデルの一つになったとも言われている。開校以来これを重視して、重点とする課題、通知票の目標、養護・訓練計画、学級経営案、週予定、月別指導計画、授業形態別の指導計画等が作成されてきた。

紙面の都合上、その一部を紹介する。

自分づくりの段階	分 野
	分 野 目 録
	段階 段階 目標
Ⅰ 段階	・日常生活を通して身のこたがらを関心をもつ。 ・いろいろな活動を通して表現力の素地を身につける。
Ⅱ 段階	・身のこたがらを処理しようとし、基礎的生活習慣を身につける。 ・友だちと遊ぶ楽しさを体験し、遊びを通して表現力の素地を身につける。 ・身近な活動からいろいろなことに興味・関心をもつ。
Ⅲ 段階	・すずんで身のこたがらをし、できるだけまわりを守って家庭や学校での集団生活に参加する。 ・具体的な活動を通して表現力の素地を身につけ、日常生活の中で生活する。 ・具体的活動を通して生活経験の拡大をはかりながら自然や社会事象にも関心をもつ。
Ⅳ 段階	・すずんで集団活動に参加し、他人に迷惑をかけないで生活する。 ・身近な生活を通して表現力をさらに伸ばし、生活上の簡単な問題を解決する。 ・自立心が芽生え、すずんで活動に乗りこんだり、課題に対し最後までやりぬく。
Ⅴ 段階	・身近な社会のしくみや働きについての理解を深め、積極的に参加しようとする態度をもち、社会の一員としての自覚をもつ。 ・必要の一員として必要となる力を身につけ、日常生活に生きて、うるおいのある生活をする。
Ⅵ 段階	・地域社会のしくみや働きについての理解を深め、積極的に参加しようとする態度をもち、社会の一員としての自覚をもつ。 ・必要の一員として必要となる力を身につけ、日常生活に生きて、うるおいのある生活をする。

自立化	社会化	表現化	職業化
基礎的な生活習慣の力とともに、集団や社会生活に必要な態度・態度を身につける。	身近な集団生活に参加する態度や社会生活に必要な態度・態度を身につける。	身近な経験・活動を通して豊かな表現能力を身につける。	家庭生活や将来の職業生活に必要な基礎的な知識・技能を身につける。
教師の助けを受けながら生活の中で基礎的な生活習慣に関心をもつ。	教師の助けや道具による手だてを受けながら生活の中で基礎的な生活習慣に関心をもつ。	教師の助けを受けながら心身の機能的発達をはかり表現活動に関心をもつ。	
教師と一緒に活動することによって基礎的な生活習慣の方法を身につける。	遊びや手広いなどを通じて、集団生活に関わりをもつ。	遊びを通して表現活動に関心をもつ。	
基礎的な方法の定着をはかり自分でやろうとする。	集団に対する関心を認め、集団生活に必要な基礎的な能力を身につける。	興味ある活動を通して表現活動の基礎的な知識・技能・態度を身につける。	具体的な作業や手広いを通して、学校生活や職業生活の役に立ち、働くことへの関心をもつ。
日常生活の中で定着した技術を先ずきし実践にしようとする。	個人生活や集団生活の中で自分や他人の生活に関心をもつ。	日常生活を通して表現活動の基礎的な知識・技能・態度を身につける。	日常生活や作業を通して表現活動の基礎的な知識・技能・態度を身につける。
日常生活の中で必要となる能力を身につけていく。	地域社会における人間関係や社会生活に必要な態度・態度を身につける。	表現的な表現能力を自分の生活の中に取り入れる。	作業や作業を通して表現活動や職業生活に必要な基礎的な知識・技能・態度を身につける。
V段階の目標をさらに認め、個人生活を充実させる。	人間関係や社会生活に対する理解をさらに深め、より豊かな生活・態度を身につける。	V段階の目標をさらに認め、社会生活の中で生きていくための生活態度を身につける。	V段階で得た基礎的な知識・技能・態度を身につけていく。

表現化		
記号例・標準的表現		
A. 量と許容	B. 単位	C. 活動・グラフ
1. 100gの重さ 2. 100mlの容量 3. 100cmの長さ	1. 100g 2. 100ml 3. 100cm	1. 100gの重さ 2. 100mlの容量 3. 100cmの長さ
4. 100gの重さ 5. 100mlの容量 6. 100cmの長さ	4. 100g 5. 100ml 6. 100cm	4. 100gの重さ 5. 100mlの容量 6. 100cmの長さ
7. 100gの重さ 8. 100mlの容量 9. 100cmの長さ	7. 100g 8. 100ml 9. 100cm	7. 100gの重さ 8. 100mlの容量 9. 100cmの長さ
10. 100gの重さ 11. 100mlの容量 12. 100cmの長さ	10. 100g 11. 100ml 12. 100cm	10. 100gの重さ 11. 100mlの容量 12. 100cmの長さ
13. 100gの重さ 14. 100mlの容量 15. 100cmの長さ	13. 100g 14. 100ml 15. 100cm	13. 100gの重さ 14. 100mlの容量 15. 100cmの長さ
16. 100gの重さ 17. 100mlの容量 18. 100cmの長さ	16. 100g 17. 100ml 18. 100cm	16. 100gの重さ 17. 100mlの容量 18. 100cmの長さ
19. 100gの重さ 20. 100mlの容量 21. 100cmの長さ	19. 100g 20. 100ml 21. 100cm	19. 100gの重さ 20. 100mlの容量 21. 100cmの長さ
22. 100gの重さ 23. 100mlの容量 24. 100cmの長さ	22. 100g 23. 100ml 24. 100cm	22. 100gの重さ 23. 100mlの容量 24. 100cmの長さ

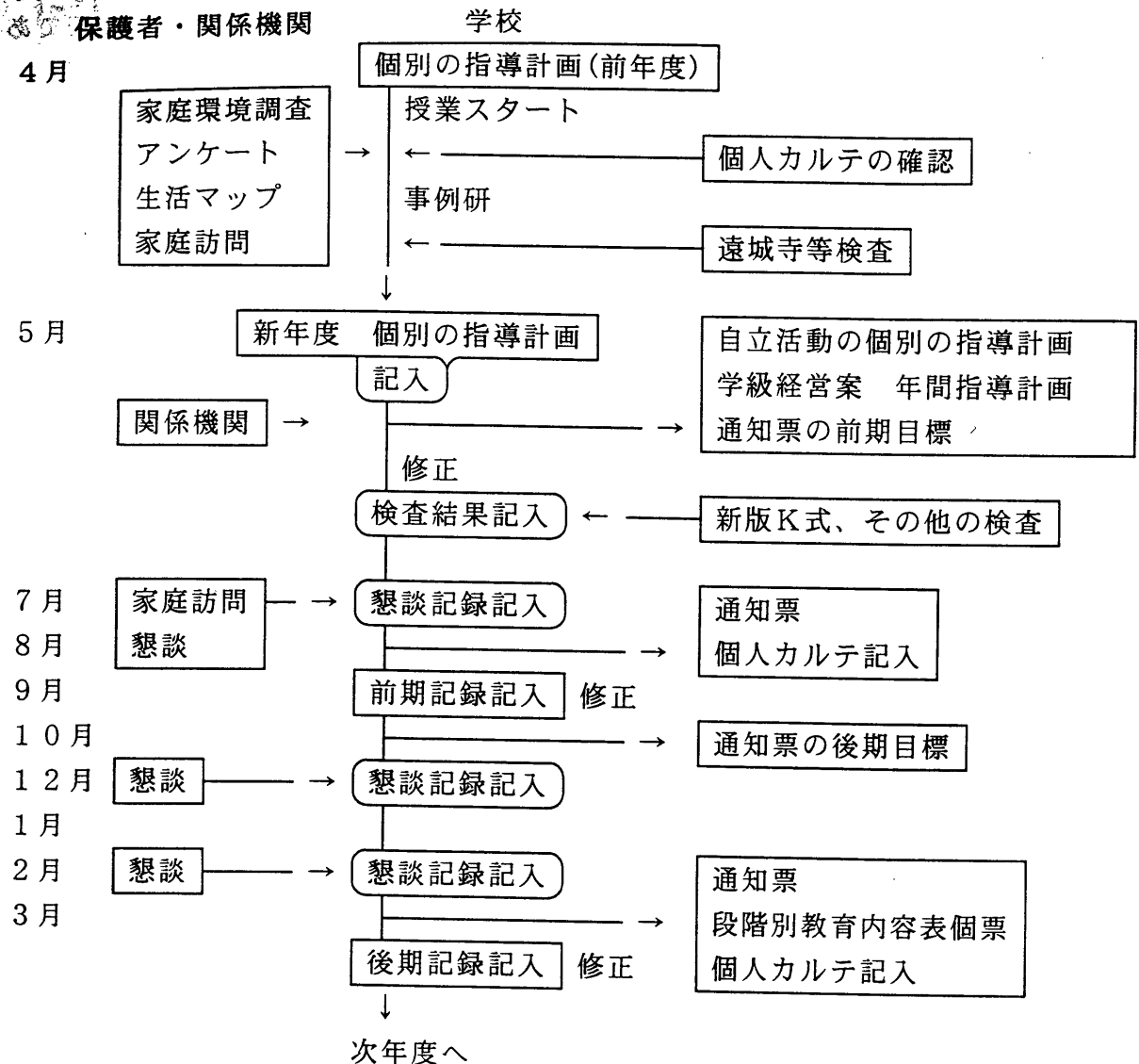
表現化		
記号例・標準的表現		
D. 活動	E. 工作	F. 音声 (録音)
1. 100gの重さ 2. 100mlの容量 3. 100cmの長さ	1. 100g 2. 100ml 3. 100cm	1. 100gの重さ 2. 100mlの容量 3. 100cmの長さ
4. 100gの重さ 5. 100mlの容量 6. 100cmの長さ	4. 100g 5. 100ml 6. 100cm	4. 100gの重さ 5. 100mlの容量 6. 100cmの長さ
7. 100gの重さ 8. 100mlの容量 9. 100cmの長さ	7. 100g 8. 100ml 9. 100cm	7. 100gの重さ 8. 100mlの容量 9. 100cmの長さ
10. 100gの重さ 11. 100mlの容量 12. 100cmの長さ	10. 100g 11. 100ml 12. 100cm	10. 100gの重さ 11. 100mlの容量 12. 100cmの長さ
13. 100gの重さ 14. 100mlの容量 15. 100cmの長さ	13. 100g 14. 100ml 15. 100cm	13. 100gの重さ 14. 100mlの容量 15. 100cmの長さ
16. 100gの重さ 17. 100mlの容量 18. 100cmの長さ	16. 100g 17. 100ml 18. 100cm	16. 100gの重さ 17. 100mlの容量 18. 100cmの長さ
19. 100gの重さ 20. 100mlの容量 21. 100cmの長さ	19. 100g 20. 100ml 21. 100cm	19. 100gの重さ 20. 100mlの容量 21. 100cmの長さ
22. 100gの重さ 23. 100mlの容量 24. 100cmの長さ	22. 100g 23. 100ml 24. 100cm	22. 100gの重さ 23. 100mlの容量 24. 100cmの長さ

(3) 運用方法

① 記入の手順

個別の指導計画とその関連文書は、図のような手順で記入し、活用した。

図1 記入の手順



② 家庭訪問や懇談での個別の指導計画の活用

われわれは家庭訪問や懇談で、個別の指導計画を次のように使おうと心掛けている。

- ア 願いについては、その根拠となる児童生徒の実態から説明する。
- イ 設定した目標には、本人、保護者、担任、関係者の願いが盛り込まれていることを説明する。
- ウ 日々の学習においては、目標に向けて適切な学習内容と支援を計画したことを具体例を交えて説明する。
- エ いい結果にしろ悪い結果にしろ、現れた子どもの姿に対して、取り組みの意図を責任を持って説明する。
- オ 家庭や地域に生きる力となるか確認する。
- カ 以後の、目標、学習内容、支援方法、協力体制等について話し合い、修正、確認していく。
- キ お互いに、明るい展望を持って、話を終える。

### ③ 評価の視点

段階別教育内容表や自分づくりの表・各種記録をもとに、個別の指導計画の「指導の経過と課題」の欄に記入し、目標・指導計画修正の根拠とした。また、子どもの成長を親と共に喜び合う中で、物理的・心理的支援は適切か、ふり返りつつ進めた。

- ア 「総合目標」は諸検査や「自分づくり」の視点から適切かどうか振り返る。
- イ 他の目標（「段階別教育内容表」）は、適切な（最優先）課題であったか。
- ウ 本人や保護者、地域や関係機関等の願いをかなえようと努めたか。
- エ 「QOLの理念・子ども中心・日々の生活を楽しく・家庭や地域社会への拡がり」を考え、目標と実践に整合性はあったか。
- オ 教師の支援（題材も含め）は、他に方法はなかったか。  
→こうしたからこうなった。 →こうしたらこうなったかも。
- カ 結果に対して保護者に説明し、一緒に評価し、目標をよりよいものにする。  
(説明責任=アカウンタビリティ)

### 3. 「生活を楽しむ」「個別の指導計画をもとにした」授業づくりの考え方

これまでに本校は、個を生かすグループ編成や、同一教材・複数課題、同一課題・複数教材等の工夫に取り組んできた。さらに今回、個別目標をもとに授業を作ろうとした。しかし、集団学習の作り方に明確な方針を示せなかった。そこで個別目標と授業は、どうつながっているのか明らかにしつつ、生活を楽しむ授業づくりを進めた。

研究の全体を構想図にまとめたものが次ページの表1である。本校の研究のベースを継承し、願う姿に向けて診断と評価を繰り返しつつ実践を進めた。その過程で、楽しい学校づくりをして、行事の見直しや精選、施設・設備の更新・新設に努めた。

#### 【4】 取り組みの方法

##### 1. 研究組織

研究部が大まかな提案を行い、各分掌や学部と協力しながら取り組みを組織化していった。個別の指導計画及び関連文書の統廃合は教務部と、自立活動の個別の指導計画は自立活動部と連携を取った、実践的な場面は特に、学部単位の取り組みとした。

##### 2. 各学部の取り組み

小学部－「自分っていいな 友だちっていいな 何でもチャレンジ」

子どもたちの発達や心の育ちを大切にしながら、よりよい支援をさぐるとともに、人格形成の基礎となる『心』を育てようとした取り組み。

中学部－「見つけよう 広げよう 深めよう」

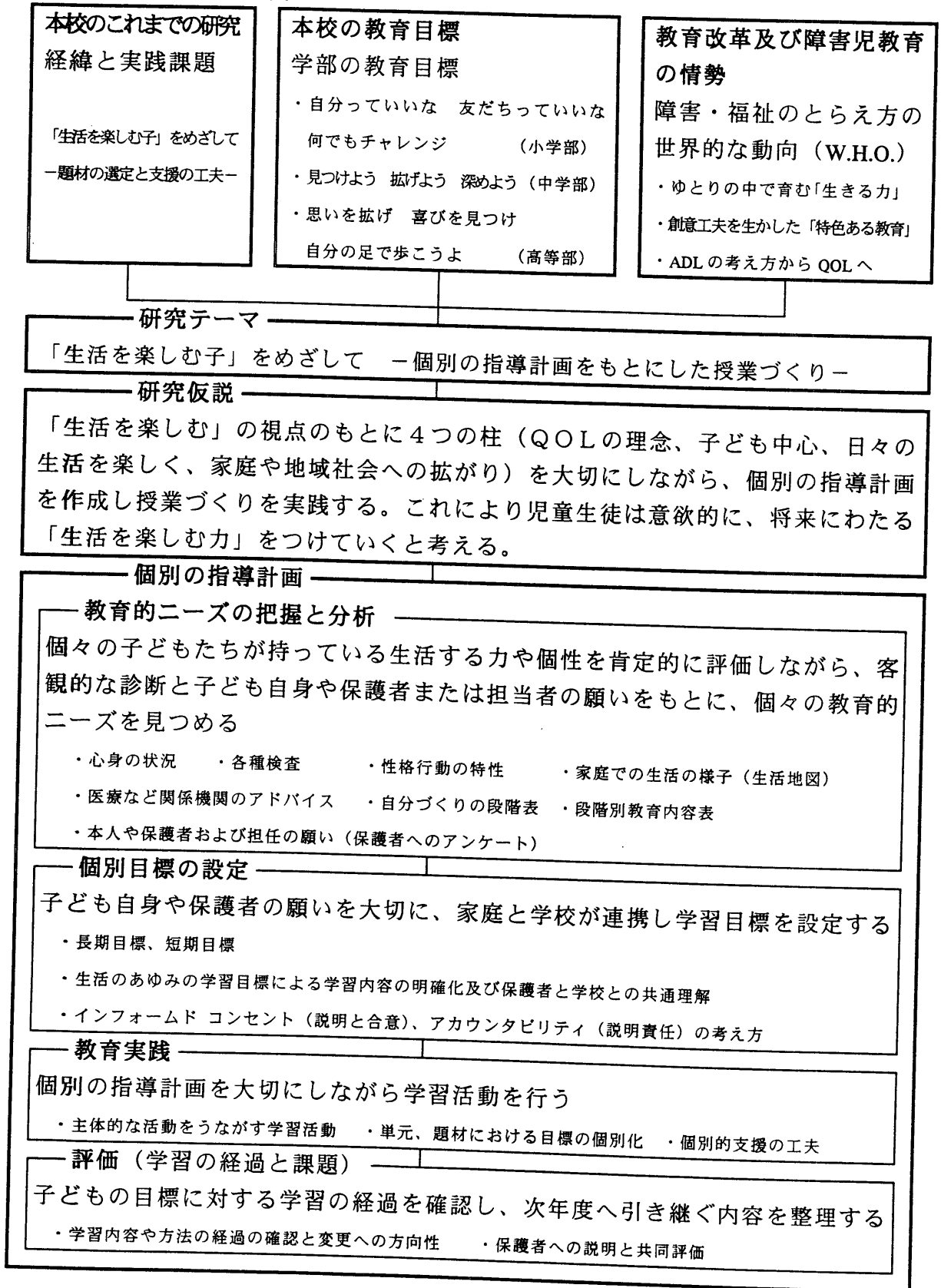
見通しの持ち方をもとにグループを作成し、一人ひとりに応じた学習内容を設定することで、生活に直結した力を育てていこうとする取り組み。

高等部－「思いを広げ 喜びを見つけ 自分の足で歩こうよ」

家庭や社会へ広がる豊かな体験と、ともに生きていく喜びの中、自らの生活をより

楽しむ姿を求めていく取り組み。

表1 研究の全体構想図



## 【5】 結果の考察と課題

### 1. 「個別の指導計画をもとにした授業づくり」について

仮説（P、5）を元に今回の研究を考察する。

授業づくりについては仮説設定当初、個々の目標をもとに授業を組み立てる試みをした。しかし障害も発達段階も様々な集団が関わりあいながら活動する場面において「個別の指導計画をもとに」授業を組み立てることは大変であった。そこで、「生活を楽しむ」授業づくりをする中で、個人の目標と授業はどのようにつながっているのか明らかにしようとした。校内研究会を重ねる中で、さまざまな様々な授業の作り方が見えてきた。それについては、各学部の取り組みで述べる。

以前に触れた「4つの柱」については、授業づくりの観点ではなく、われわれの研究のベースに流れていることを確認した。今後もこのような、学校や地域の特色を大切にしていきたい。

今回の研究は、児童生徒一人ひとりをより見つめることをねらって始まった。

児童生徒サイドから考えると、取り組みの結果「楽しむ力がつきつつある。」という実感はある。しかしながら、客観的な評価として示すことはできなかった。現在は、まず「楽しむ」の質について考え、分析の基礎資料の一つにしようとしている。なお、一人ひとりについて考えた将来像が、それでよかったのかどうかという検証は、今後の卒業生の追跡調査に待たれる。

教師サイドから考えると以下の点が成果としてあげられる。

- ・ 教員同士で、子どもたちについて語り合う機会が増えた。
- ・ 自分一人だけの考えでなく多角的な視野で子どもを見つめ、目標・支援を検証し、みんなで支援していこうとした。
- ・ 授業のねらいをはっきりして、よりの確な学習の設定や支援をめざした。
- ・ 本人や家庭の願いをよりくみ取ろうという姿勢や、願いにもとづく実践が目立ち始めた。

研究を進める中、不十分であるが仮説を設定して取り組んだ。しかし、仮説に縛られすぎることなく多様性と柔軟性をもって研究に取り組めたのではないかと考える。

課題としては、「発達」の系統性及び「心」の支援の両面と、「障害特性」をさらに考慮した「自分づくり」を充実させていきたい。自分づくりの充実に伴う、個別の指導計画群の再構築が必要になる可能性がある。

### 2. 総合的な考察と課題

「『生活を楽しむ子』をめざして」という大テーマのもとで、「題材の選定と支援の工夫」「個別の指導計画をもとにした授業づくり」の2つの取り組みをしてきた。この間の本校の変容について、本校著「生活を楽しむ授業づくり」で詳しく述べているので、ここでは概略を述べる。

以前は「言われたとおりにする」「将来のために今我慢する」ことが重視されがちであった。社会の変化とともに本校も「生活の質」を高めようと「今を楽しみ将来も楽しむ」を合い言葉に発想を転換させていった。子どもが主人公となる「生活を楽しむ」授業づくりがなされた。自己決定・自己実現をめざす子どもたちを願い、支援の方法や考え方を変えてきた。

子どもたちの変化は、大人側の姿勢や支援、ひいては社会の変化によるところが大きいと考える。前研究では、子どもに寄り添う・待つに代表される教師の変容があった。今回の研究では、自尊感情を大切にして、一人ひとりの全体像をとらえ、より個のニーズに応じた支援をしようとしている姿勢が大きな変化ではないかと思う。指導の意図は持ちつつ、支援的に接することを心がけている。「できたか、できなかったか」ではなく「しようとする」気持ちを支える心理的な支援と、発達や障害に応じた物理的支援をこころがけようとしている。さらには、それらを統合した支援体制に思いをめぐらせている。「生活を楽しむ力をつけていく」とことと「生活を楽しむ」ための支援体制のどちらも大切にしたいものである。

学部間の役割や連携について考えるとともに、就学前から卒業後までの支援システムを充実していくことは、今後の大きな課題である。

今後も「主体的に自らの生活を切り開いていく姿」がさらに豊かさを増すよう、私たちの支援をふり返りつつ歩みたいものである。

(岡村 清 ・ 研究部)